

“おネエ” キャラクターの人称

—バラエティ番組とフィクション作品を材料に—

河野 礼実*

1. はじめに

2000年代後半頃から、メディア上では、いわゆる「おネエ¹ (系) タレント」「おネエ (系) キャラ」と呼ばれる人たちが数多く登場するようになり、近年さらに幅広い活躍を見せている。

「おネエ」とは、もともとゲイコミュニティのことばで、「言葉遣いやしぐさが女性的なゲイ」を指す。しかし、阿部 (2014) は、メディア上での「おネエ」の定義について、「同性愛者」である必要はなく、「生物学的に体が男、あるいは男だった」人となる。たしかに「キャラ」ということなので、そういう女性的雰囲気とか女性性を感じ取られる特徴を持っているということなのだろう。」と指摘する。つまり、近年メディア上では、その人の性的指向にかかわらず、「生物学的に男性だが (あるいは男性であったが)、装い・しぐさ・言葉遣いなどで女性ジェンダーの特徴を有する人」のことを「おネエ」と呼ぶ傾向にある。本稿では、メディアに登場する「おネエ」キャラクターの言語行動を対象としたことから、後者の「おネエ」の定義を採用する。

「おネエ」が話すことばは、一般的に「おネエことば」と呼ばれているのだが、「おネエことば」に関する先行研究はいまだ少ない。阿部 (2014) は「おネエことば」を「女性語を利用した混雑的 (ハイブリッド) 言語行為」と定義し、「男性性、女性性の持つステレオタイプの特徴をことば

の中に巧みに生かす言語行為である」と述べている。また、中村 (2010) は「おネエことば」はジェンダー規範を利用しつつも、その規範を越境する創造的な言語行為であると言う。このようなジェンダー規範を越えた創造的言語行為について調べることは日本語とジェンダーの結びつきを改めて明らかにすることにつながり、日本語とジェンダーの研究分野において大きな意義があると考えられる。しかし、これまで行われてきた研究の多くは、印象レベル、あるいは少数の話者の限られた例を材料にした分析に留まっている。そこで筆者は複数の話者から具体的データを採取し、実証的研究を試みた。

2. 分析対象

2種類のデータを分析に用いた。まず1つ目のデータでは、テレビのバラエティ番組に出演している「おネエタレント」と呼ばれる人物12名を対象とした。分析材料は、2013年1月～2014年5月に該当者が出演したテレビのバラエティ番組16本、それぞれ5分～10分の会話録画データである。もう1つのデータは、いわゆるフィクション作品 (映画、テレビドラマ、小説、マンガ) に登場する「おネエ」キャラクターの登場人物13名を対象とした。対象作品は2000年以降の作品が中心である。それぞれの対象者については資料1・2を参照されたい。

以下、本稿では、バラエティ番組のデータを〈データ①〉、フィクション作品のデータを〈デー

*お茶の水女子大学大学院院生

タ②)と呼ぶ。なお、本稿で対象としたのは、あくまで「キャラクター」のことばであり、実際に「おネエコミュニティ」で使用されている「おネエことば」を対象としているわけではないという点をここで注意しておきたい。

3. 分析項目

筆者は、2種のデータから得られた「おネエ」キャラクターの言語行動について、言語形式、言語随伴行動、音声、視覚的要素の観点から分析を行った。本稿では、言語形式の1つである「人称」について取り上げる。

4. 分析結果

4.1 自称

日本語の人称は、話し手の属性や会話の相手・場によって異なる。話し手の属性には年齢・性別・職業・階層などが含まれるが、中でも性別による使い分けはかなり明確に区別されている。特に自称はその傾向が強い。「あたし」「あたくし」は女性専用形式、「ぼく」「おれ」は男性専用形式であるとされている。「わたし」は男女ともに使用されるが、男性はフォーマルな場面で特に使用し、一方で女性はフォーマルな場面でもインフォーマルな場面でも使用される。このようにその使用範囲が広いことから、「わたし」は女性多用形式とされている。

「おネエことば」に関しては、マリィ (2011) やごーまん・JUNKO (1994) において「あたし」が代表的な自称として挙げられている。しかしこれは1章で述べたように、印象レベルあるいは限られたデータをもとにした結果であると推察される。では、今回対象としたデータではどのような自称が用いられていたのか、まず〈データ①〉バラエティ番組の結果から見ていきたい。

4.1.1 自称〈データ①〉

〈データ①〉の対象者が使用していた自称を表1にまとめた。

【表1】〈データ①〉で観察された自称

	自称	人数
1種使用	わたし	2
	あたし? ²	1
	ぼく	1
2種使用	あたし／わたし ³	2
	わたし／ぼく	2
	わたし／わたくし	1
	あたし／自分の名前	1
3種使用	わたし／あたし／*おれ	1
不使用		1
計		12

全体的に女性専用・多用形式とされる「あたし」「わたし」を使用する者が多い。しかし一方で、男性形式である「ぼく」を使用している対象者も3名いた。この3名は全員男物の衣服を身にまとっている。いわゆる「女装」をしている対象者の中に「ぼく」を使用する人物は1人もいなかった。

また、12名中7名が複数種の自称を使用していた。昭和の男娼のことばについて分析を行った阿部 (2010) でも、「あたし」と「わたし」2種使用が観察された。そこでは「あたし」は1人の男娼というグループの中の一員として連帯をあらゆる「職業的要素」を持ち、「わたし」は、グループの代表としての「地位」を示し、「安定」した人間関係を示す時に使われる」という使い分けが見られたが、今回の対象者にはそのような使い分けは見られず、同じ話題でも「あたし」と「わたし」の混用が見られた。

今回のデータ中で、はっきりとした使い分けが観察されたのは、対象者Iの「あたし」と自分の名前、そして対象者Gの「おれ」使用である。

まず対象者Iに関しては、データとした番組は

ゲストが「ゆかりの地」を旅行し、そのVTRをスタジオで見ながら会話をするというスタイルの番組であった。対象者Iは番組ゲストとして登場し、故郷を旅する。リラックスした旅行中、親しい人との会話では自分の名前を自称として用い、その映像を見ているスタジオでは「あたし」を使用していた。つまり、対象者Iは「あたし」という自称を、自分の名前を自称として使用するより、フォーマルな自称として捉えていると考えられる。

次に、〈男性性〉の強い自称である「おれ」の使用に関してだが、これはかなり特殊な場面での使用であった。対象者Gは他の発話では基本的に「わたし」を使用しているのだが、1発話だけ「おれ」の使用が観察された。

- (1) [毎回女性ゲストに男性アイドルグループ・関ジャニ∞のメンバーの中で誰がタイプか聞くのが恒例なので、それを自分にも聞いてほしいと対象者Gが関ジャニ∞に訴える場面。]

G : それからあるじゃん。ほら。ゲストに聞くー

(↑) [XX⁴

村上⁵ : [いやもうトーク行こうや。

G : え、ちょっと待ってよ。ゲストに聞く、誰かあるでしょうが。

村上 : いや、だから、あれ、女性ゲストが来たときだけ聞いてんねん。

G : 《ドスのきいた低い声で》俺もしろや。⁶

会場 : 《笑い》

(『関ジャニ∞のジャニ勉』2014年3月5日)

対象者Gは誰がタイプか聞いてもらえなかったのを抗議する際、「おれ」を使用している。しかも、この発話はそれまでとは異なるドスのきいた低い声で「俺もしろや」と言っており、この発話において対象者Gは一時的に《男》キャラを発動させている⁷。対象者Gのこの言語行動は、「おネエタレントは男性がもっぱら使用する自称「おれ」は

使用しない」という受け手の期待を裏切りつつも、「おネエタレントは〈男性的〉な側面を(隠し)持っており、それが不意に表出される場面を見てみたい」という一見すると相反する受け手の期待を満たし、笑いを生み出している。

4.1.2 自称〈データ②〉

表2は、〈データ②〉で使用された自称についてまとめた表である。

【表2】〈データ②〉で観察された自称

	自称	人数
1種使用	わたし	3
	わたし	3
	私	2
2種使用	あたし／わたし	1
	アタシ／私	1
	私／アタシ	1
	あたし／*僕	1
不使用		1
計		13

小説作品では、「私」(振り仮名なし)が使用されており、この漢字からは「わたし」「わたくし」の2種類の自称が考えられる。しかし今回この漢字が使用されていたのはすべてインフォーマルな場面であることから、「わたくし」ではなく「わたし」であると推測される。

したがって、表記のユレはあるものの、〈データ②〉で使用された自称は「あたし」「わたし」「ぼく」の3つであると言える。男性形式「おれ」の使用は皆無。「ぼく」使用は1名にのみ見られたが、これについては一時的に〈おネエ性〉を隠す場面で使用されていた。

具体的には、マンガ『失恋ショコラティエ』(4巻・第15話)で、有名ショコラティエの六道がテレビに出演し、インタビューを受けている場面で、「僕」^{ぼく}を使用している。このシーンでは、普段の〈おネエ性〉を封印し、テレビ出演用に、「男性っぼく」ふるまっている。そのため、普段使用

している「あたし」を避け、「僕」を使用している。さらに、その直後には、テレビに映る六道を見ていた爽太（主人公・男性）が、六道の「テレビ用の話し方」に違和感を表明している。つまり、「僕」を含む六道の言葉遣いは、「おネエ」キャラの六道のことばとしてはふさわしくないと表現されているのである。

したがって、〈データ②〉対象者に使用される自称は、主に「あたし」「わたし」であり、男性形式の「おれ」「ぼく」は選ばれないということがわかった。また、〈データ①〉と比較すると、〈データ②〉より〈データ①〉のほうが自称のバラエティに富んでいるということがわかる。

4.2 対称

次に、対称についても見ていきたい。相手を指す言葉である対称には、「あなた」「おまえ」「きみ」「あんた」などがあるが、「おネエことば」に関する先行研究では「あんた」が代表的な対称として挙げられている。対称についてはまずフィクション作品のデータ、〈データ②〉のほうから結果を述べる。

4.2.1 対称〈データ②〉

〈データ②〉では対象者13名全員が対称を使用していた。なお、対象作品中の他の登場人物はそのほとんどが、対称ではなく、名前やその人の身分や立場を示す名詞で相手呼んでいた。

観察された対称のうち、使用者が多い順に「あんた」10名、「あなた」4名、「おたく」「てめえ」「きみ」がそれぞれ1名であった。もちろん複数種使用している対象者もいたが、圧倒的に「あんた」が使用者、頻度ともに多いという結果であった。

「あんた」使用者10名の中でも、特に小説『肩ごしの恋人』に登場する「文ちゃん」は、かなり頻繁に「あんた」を用いていた。文ちゃんは、主人公の萌（女）とその友人のり子（女）を一切名前で呼ばない。最初から最後まで「あんた」と呼ぶ。文ちゃんのように、特定の相手に対して「あんた」を一貫して使用し、その人物の名前で

呼ばないという対象者は、〈データ②〉内で他にも数名観察された。金丸（1997）は「『アンタ』を用いる場面は、（中略）非常にインフォーマルな場面に限られ、時には親愛を込めて用いられる場合もある」と述べ、「あんた」の親愛性について指摘している。今回のデータでも「あんた」を親しい友人に使用する例が多く、金丸の言うように親愛を込めた使用が示唆される。

しかし、一方で、データ中では、相手を批判する場での「あんた」の使用も少なくない。この「あんた」使用は親愛表現とは言いがたいものである。これに関しては、対称の使用によって生じる失礼さが関係していると考えられる。対称使用に伴う失礼さについては金井（2002）やYonezawa（2013）で詳しく説明されているが、対称はその失礼さゆえ、会話内で避けられる傾向にあり、省略するか、代わりに相手の名前や身分・立場を示す名詞を用いるのが一般的である。それにもかかわらず〈データ②〉の対象者全員が対称を使用していた。この点からは、「おネエ」キャラクターは対称を使用してもその失礼さが他の属性の登場人物に比べ軽減される、あるいは対称使用がもはやフィクション作品に登場する「おネエ」キャラクターのことばの特徴の1つとして作品の作り手および受け手に認識されているのではないかと考えられる。

〈データ②〉では乱暴な対称である「てめえ」が1例のみではあるが観察された。特徴的な使用がなされていたので少し触れておきたい。

- (2) [磯村（ママのバーで失踪した兄の借金を返すために働いていた男性）が兄を追いかけて逃げようとする。ママはそれを捕まえる。]

ママ：てめえは一生な、タダ働きなんだ(手に持っていた大根を磯村の口に勢いよく突っ込む)よ。

(ドラマ『WATER BOYS』第11話)

それまでのママの発話に比べ、(2)ではかなり乱暴な口調になっている。ママは普段対称に「あんた」を使用しているが、ここでは一時的に《男》キャラを発動し、「てめえ」を使用している。4.1.1で取り上げた、自称「おれ」使用同様、対象者がいわゆる「男ことば」の言語資源を、ときに音声変化を伴って、《男》キャラを発動させる現象は、〈データ①②〉ともに複数観察された。

4.2.2 対称〈データ①〉

〈データ①〉内で対称の使用が観察されたのは12名中半数の6名であった。この点が〈データ②〉との大きな違いである。

〈データ①〉で観察された対称は、使用者数が多い順に「あんた」「おまえ」「あなた」「きみ」「てめえ」の5種であった。確かに〈データ②〉同様「あんた」が一番多いのだが、〈データ①〉において「あんた」を使用していたのは12名中3名とかなり少なく、対象者Fは7例と一定数使用が観察されたが、他の2名(対象者DとH)は1例のみであった。(3)が対象者H、(4)が対象者Dの使用例である。

(3) [「最近つまらなくなった」とバビ江(ミッツとは以前から知り合いのおネエ)に指摘され、不機嫌そうに言う。]

H: いや、あんたより面白いわよ。

(4) [対象者Eが対象者Dに反論し、口論になる。]

E: まあ前回ほら、いろいろやいのやいの言われたからさ、(司会者(男): うん) ちょっとちょっと今回は反撃しないとね。

D: やいのやいのってあんたが言ってきたんじゃない。わたしは別に逆らっていない。

((3)(4)ともに『AKB48vs芸能人ファミリー&おネエ48』2013年1月3日)

(3)(4)はいずれも、自分に意見してきた相手に対して反論する際に「あんた」が使用されており、発

言には怒りが込められているように感じられる。

一方、「あんた」使用が7例観察された対象者Fの発話を(5)に挙げる。

(5) [カタツムリを飼育している男性についての新聞記事が紹介され、その話題について若林(女)と話している。]

F: 殻って最初からついてんの?

若林: ついてるついてる。

F: 《右手で丸を作って》ちっちゃいか、
[柔らかい殻がついてんの?]

若林: [ちっちゃい] (.)⁸ついてる。うん。

F: えあんたちっちゃいカタツムリ見たことある?

若林: ある。うち、なんかいえにいっぱいいた。

(『5時に夢中!』2014年5月5日)

対象者Fの発話は、先の二人とは違い、反論発言でもなければ怒りも込められていない。対象者Fは若林以外の相手にも「あんた」を使用しており、今回のデータ内で相手を名前で呼ぶことは1度もなかった。また、今回対象とはしていないのだが、対象者Fが初対面の一般人と話すバラエティ番組を観察したところ、「あんた」はもちろん対称自体使用されていなかった。以上のことから、対象者Fは先に触れた〈データ②〉の対象者(例: 文ちゃん)同様に、インフォーマルな会話で「あんた」という対称を親愛を込めて使用しているという可能性が考えられる。

なお、対象者Fが普段「あんた」を使用している相手に対して怒りや不満を示す際には、「あんた」から「あなた」あるいは「おまえ」にシフトしていた。これは対象者Fにとって「あなた」「おまえ」は「あんた」に比べ親愛性が低い対称であり、「あなた」「おまえ」を用いることで相手を突き放していると考えられる。

「おまえ」に関しては対象者F以外にも、対象者A・Kに使用が見られた。しかし、この2名

が「おまえ」を使用していたのは引用部分のみであった。また、対象者Aは「おまえ」同様「てめえ」も引用部分で使用していた。

5. まとめ

(1) 自称について

- ・〈データ②〉では女性形式の自称を採用し、男性形式の自称を避ける傾向にある。
- ・一方、〈データ①〉では男性形式の「ぼく」も使用される。しかしそれは非「女装」者に限り、「女装」している対象者は「あたし」「わたし」「わたくし」「自分の名前」を使用する。
- ・〈データ①〉では、〈男性性〉の強い自称である「おれ」の使用が、一時的に《男》キャラを発動させるという特殊な場面において1例観察された。
- ・〈データ①〉は〈データ②〉に比べ、自称のバリエーションが多い。

(2) 対称について

- ・まず大きな特徴として、〈データ②〉は対象者全員が対称を使用していたが、〈データ①〉は対象者の半数にしか使用が見られなかったという点が挙げられる。
- ・〈データ①②〉ともに最も使用頻度、使用者数が多かった対称は「あんた」。しかし、〈データ②〉は13名中10名、〈データ①〉は12名中3名（しかもそのうち2名は1度しか使用していない）で大きな差がある。
- ・〈データ②〉の「あんた」使用者には、相手に対して一貫して「あんた」を使用し、その人物を名前では呼ばないという対象者が複数見られた。〈データ①〉の対象者Fも同様であった。〈データ②〉の「あんた」使用対象者および〈データ①〉の対象者Fは、「あんた」を親愛を込めて用いているのではないかと考えられる。

(3) 全体をとおして

〈データ①〉は〈データ②〉に比べ、バリエー

ションがあったが、一方〈データ②〉は自称・対称とも対象者間の共通性が高いという結果が得られた。〈データ②〉の対象者が、他者に作られたキャラクターであるということを考えると、作品の作り手（および受け手）に「おネエキャラクターの登場人物」が使用する人称に対する共通したイメージ、ステレオタイプが存在していると考えられる。人称は、「おネエ」というキャラクターを演出する上で、重要な要素として働いているのではないだろうか。

具体的には、「自称に「あたし」「わたし」といった女性形式を用いる。一般的に避けられる傾向にある対称を避けずに使用し、対称の中でも特に「あんた」が広く用いられる」という点で共通していた。つまり、形式面においては女性形式を使用し、男性形式を避ける傾向にあるが、一方で「対称の多用」といった、特定のジェンダーとは結びつかない独自の特徴を持っている。すなわち、フィクション作品の「おネエ」キャラクターの人称は、特に対称に関しては、「女ことば」と同じではなく、「女ことば」を資源として用い、そこに独自の特徴が加えられたものである。

人称1つとってみても「おネエ」キャラクターの使用することばは、「女ことば」とまったく同じというわけではなく、「女ことば」を資源として用いた「混雑的（ハイブリッド）言語行為」（阿部（2014））であるということが明らかになったと考えられる。

註

- 1 「オネエ」「おネエ」「オネエ」「おネエ」など表記にはユレが見られるが、ここでは「おネエ」に統一する。
- 2 おそらく「あたし」と言っているのだが、「わたし」との判別が困難であった。
- 3 自称を複数種使用している場合には、より使用頻度が高いものを左に挙げた。
- 4 (↑): 音調の上昇を示す。

[: 複数の会話参加者の発話が重なり始めた時点を示す。

XXX：聞き取り不可能な発話を示す。

()：発話に関する注記を示す。

《笑い》：笑いが起きたことを示す。

- 5 村上是「関ジャニ∞」のメンバーで、番組では司会進行役を担っている。
- 6 発話例中の下線は該当箇所を示す。
- 7 一時的なキャラの発動に関しては、定延(2011)に詳しい説明がある。
- 8 (.)：ごく短い沈黙を示す。

参考文献

- 阿部ひで子ノース (2010) 「昭和の男娼のこぼの分析：「お姐さん」のこぼ」『世界をつなぐこぼ：こぼとジェンダー/日本語教育/中国女文学』遠藤織枝、小林美恵子、桜井隆編著 三元社 p.65-80
- 阿部ひで子ノース (2014) 「ゲイ/オネエ/ニューハーフのこぼー男性語と女性語のあいだ」『日本語学』33 (1) p.44-59 明治書院
- 金井勇人 (2002) 「失礼さという観点から見た二人称指示の体系」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第3分冊』48 p.83-91 早稲田大学大学院文学研究科
- 金丸美美 (1997) 「人称代名詞・呼称」『女性語の世界』井出祥子編 p.15-32 明治書院
- 河野礼実 (2015) 「“おネエ”のキャラクタの言語行動ージェンダーを演出する資源のクロスジェンダー的使用ー」『社会言語科学会第36回大会発表論文集』p.30-33 社会言語科学会
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- マリイ、クレア (2007) 『発話者の言語ストラテジーとしてのネゴシエーション行為の研究』ひつじ書房
- マリイ、クレア (2011) 「おネエキャラのこぼーJapan-TVにおけるジェンダー/セクシュアリティー (第3回講演)」『装う/奏でる/話すージェンダーを演じる』p.57-83 愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所
- マリイ、クレア (2013) 『「おネエこぼ」論』青土社
- ごーまん・JUNKO (1994) 「ONEH語入門 使いこなせば女王様」『ゲイの学園天国!：国語・算数・理科・社会、ゲイにはゲイのやり方がある!』別冊宝島 p.104-105EX 宝島社
- 定延利之 (2011) 『日本語社会のぞきキャラくり：顔つき・カラダつき・こぼつき』三省堂
- 田窪行則 (1997) 「日本語の人称表現」『視点と言語行動』田窪行則編 p.13-44 くらしお出版
- 中村桃子 (2010) 「こぼで装うジェンダー (第2回

講演)」『女性学連続講演会 14』p.17-47 大阪府立大学女性学研究センター

メイナード、泉子・K (2005). 『日本語教育の現場で使える 談話表現ハンドブック』p.3-9 くらしお出版

Yoko Yonezawa (2013) 「二人称代名詞「あなた」に関する一考察：国会議事録の分析を通して」the 18th Conference of the Japanese Studies Association of Australia

【資料1】〈データ①〉対象者 (年齢・職業)

A：美輪明宏 (78：歌手、俳優、演出家) /B：尾木直樹 (67：教育評論家、大学教授) /C：I K K O (52：美容家) /D：小椋ケンイチ (おぐねー) (45：ヘアメイクアップアーティスト) /E：本田ヒカル (ピカ子) (42：メイクアップアーティスト) /F：マツコ・デラックス (41：コラムニスト、エッセイスト) /G：はるな愛 (41：タレント) /H：ミッツ・マングローブ (39：歌手、女装家) /I：I V A N (30：モデル、アーティスト、タレント) /J：假屋崎吾吾 (不明：華道家) /K：クリス松村 (不明：タレント) /L：ナジャ・グランディーバ (不明：タレント、パフォーマー)

※対象者を選ぶ上で、以下の2つのランキングを参考にした。

- ① 「be ランキング 好感が持てるおネエキャラ芸能人」朝日新聞2013年5月18日
- ② 「好きなおネエキャラタレントランキング」goo ランキング 2013年7月4日 http://ranking.goo.ne.jp/ranking/category/022id/video_TCJBBejKAVI1_all (アクセス日：2014年1月20日)

※年齢は2014年5月1日現在のもの。対象者の情報に関しては、対象者個人のホームページ、ブログ、著書を参照した。

【資料2】〈データ②〉対象者 (対称登場人物)

M：喫茶バー「ともしび」のママ (映画『ウォーターボーイズ』(2001)/ドラマ『WATER BOYS』(2003)) /N：沢鍋錦二 (映画『ヘルタースケルター』(2012)) /O：大野原ハジメ (ドラマ『つるかめ助産院～南の島から～』(2012)) /P：黒崎駿一 (ドラマ『半沢直樹』(2013)) /Q：六道誠之助 (ドラマ『失恋ショコラティエ』(2014)) /R：えり子さん (小説 吉本ばなな『キッチン』(2002)) /S：文ちゃん (小説 唯川恵『肩ごしの恋人』(2004)) /T：黒崎駿一 (小説 池井戸潤『オレたち花のバブル組』(2010)) /U：ハジメ (小説 小川糸『つるかめ助産院』(2012)) /V：奥山真澄 (マンガ 二宮

河野 礼実：“おネエ”キャラクターの人称

和子『のだめカンタービレ』(2002) /W：沢鍋錦二
(マンガ 岡崎京子『ヘルタースケルター』(2003)) /X：
天ちゃん (マンガ ジョージ朝倉『ピースオブケイク』
(2003～2009)) /Y：六道誠之助 (マンガ 水城せとな『失
恋ショコラティエ』(2009～2011))